LOVE　AFFAIRS

希里　凛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＶＥ　ＡＦＦＡＩＲＳ

【Ｎコード】
Ｎ６７０６Ｂ

【作者名】
希里　凛

【あらすじ】
ある春の日の夜、僕は偶然とても美しい光景を見る。。。ひとつの道を挟み住む、僕と隣のお姉ちゃんとふたりの兄妹が繰り広げるちょっと異常？で不思議な恋愛模様。

春…薄い桜色のカーテン。

僕はいけないものを見てしまった…。
あー、見るんじゃなかったと後悔もする。

でも、それはとても綺麗な光景だった。

暖かい春の夜、僕は机に向かい眠気眼を擦りながら実力試験のテスト勉強をしていた。
僕の部屋は二階にあって窓は北向きにある。
僕はただなんとなく道路一本離れた白い家の窓にふと目をやる。
夜だというのに開けっ放しの窓…電気の明かりで分かる部屋の中と薄い桜色のレースのカーテン。
その、桜色のレースのカーテンが春の夜風にそっと気持ち良さげに揺れている。
（いかん、催眠術にかかりそう。）
頭を左右にぶるぶると振り、勉強再開、背伸びをし大きく息を吐いた僕は風に大きく揺れたレースのカーテンの隙間に目を疑った。
…妻夫木咲良（つまぶきさくら）。

僕んちと咲良の家が挟む道路でここはA市とB市にみごと分かれる。
だから小中は当たり前の様に違って、高校に上がり僕は近所に住む咲良を知る。
『砺波くん、家近所だね。』と、咲良がニッコリ笑い話かけてくれたのはつい最近の事だ…。
透き通るような白い肌、頬と唇は薄いピンクで愛らしい瞳をしている、こんな美少女が道を隔てて

住んで居たなんて驚きだった。

話がそれた…。

その咲良が部屋の中、裸体で立っている。
初めて見る生の裸体に僕の目は釘づけになる。
しばらくして見覚えのある男が部屋に入ってくるやいなや裸体の咲良を抱きしめそっとキスをした。
薄い桜色のレースのカーテンはそんな二人を優しく包むように夜風に揺れる。
すーっと通った首筋、顎を天(そら)に向ける咲良、男は咲良の白いほどよい胸の横からそっとキスをする…。
キスをされる度に開いてる様に見える咲良の口。
僕はそんな咲良がいつもより一段と綺麗に見えた。
風に靡くレースのカーテン、変わる場面。
初めて見るその営みに僕はいやらしい気持ちではなく、美術館で美しい絵画を見ているそんな感じで
見惚れていた。
男は咲良の身体を上からきっと足の爪先まで愛すとふたりは窓から姿を消した…。

綺麗過ぎる光景…薄い桜色のカーテンに包まれた美しい情事。
しばらく放心状態…テスト勉強どころではなくなった。

ピ、ピ、ピ、ピ、ピ。
「うんんん〜。」
寝たのか寝てないかの分からないような状態で僕は鞄に教科書を詰め込み、朝食も食べずにぼーっとＴＶを見る。

「瞬、時間だよ。」
母さんの声でハッとし鞄を持って玄関に向かう、ドアを開けると真っ直ぐ先には、咲良の家。
僕は咲良の部屋の窓を見つめ、小さくため息をつく。
（さ、行こう。）
進行方向を見た俺の前に咲良の家を悲しそうに見つめる隣の家の１つ上の茜ちゃんが立っていた。
「どうしたの、茜ちゃん？。」
「あ、おはよう瞬。」
茜ちゃんは僕を見て優しく微笑む。
「どうしたの？、元気ないね。」
「うんん、何もないよ。」
そう言えば、茜ちゃんは咲良の兄貴、妻夫木ひなたと付き合ってるんだ。
「今日は、彼氏と行かないの？。」
「えっ？、あ、向こうで待ち合わせ。」
茜ちゃんはなぜか戸惑っている様子で言う。
「ふーん。」
「瞬、途中まで一緒に行こうか？。」
「うん。」
なんとなく片言の言葉。
いつもならベラベラ煩いほど喋ってくるのに、ほんと今日は変だと思いながら、僕と茜ちゃんは歩道橋を昇り、茜ちゃんがいつも咲良の兄貴と待ち合わせしている歩道橋の下まで歩く。
「茜、おはよう。」
咲良の兄貴が茜ちゃんに声をかける。
「あ、うん。」
目を合わさずに素っ気無い茜ちゃん。
そんな茜ちゃんを見、僕は咲良の兄貴の顔を見た。
「あ…。」

思い出す、桜色のレースのカーテン越しの情事。
裸体で立っている咲良の部屋に入って来た見覚えのある男。
見覚えのある男…それは、咲良の兄貴、ひなただった。
えっ、どう言うこと?。
あ、なんだ?。
なんて言うんだこういうの…なんて言うんだった、こう言うの?。
咲良と兄貴…咲良と兄妹…兄妹の情事…あ、近親相姦?。
頭が変になりそう。
変になりそうな頭を必死でくい止めようとしていると、今度は後ろで走りながら咲良が呼ぶ。
「お兄ちゃ〜ん。」
うわ〜っ、どんな顔してふたり見ればいいんだぁ?????。
僕が思わず茜ちゃんの顔を見ると、真っ青?な顔で黙って突っ立っている。
えっ、さっき悲しそうな顔で咲良の家を見つめてた茜ちゃん…まさかっ、まさか茜ちゃん…?。
茜ちゃんも昨夜のふたりのことを見てしまったんだと僕は気づく。
うわ〜。
「あっ、おはよう。砺波くんも一緒だったんだ。」
「あ、うん。」
嬉しそうにニッコリ笑う愛らしい咲良と昨日の咲良が交差し、僕はとっさに目をそらす。
しまった目をそらしたら変に誤解されちゃうだろうが…目をそらす必要はないのに…咲良達は俺が見ていた事を知らない…。
なんて色々考えている僕の手を咲良はギュッと握り走り出した。
「邪魔したら行けないから、先行こう。」
「えっ、あっ?。」
僕の手を強く握りしめる咲良の白い手を見て、僕はなぜか不思議な気持ちになった。

花水木。

僕の家の前には白色の花水木が街路樹として植えてあり、咲良の家の前には赤色の花水木が植えてある。
春、４月から5月の終わり頃まですごく綺麗に花を咲かせる。
僕は小さい頃からなんとなく花水木の花が好きでこの時期になると、家を通り越しよく寄り道というものをした。
それは高校生になった今でも変わらない。
青い空と花水木。
僕はゆっくりと眺めながら歩く。
「砺波くん、何してるの？。」
目線をさげ、声の方を見ると、薄い桃色のワンピースを着た咲良が不思議そうな顔で僕の顔を見ていた。
「妻夫木…。」
「なに…してるの？。」
「あれ、見てる。」
僕は花水木を指差し、咲良はその指の先を見た。
「あ、花水木見てたんだぁ。」
僕達ふたりはしばらくの間、花水木を見つめた。
「好き…なんだ、小さい頃から…綺麗だろ、あの花。」
「うん。私も好きよ。でも、花水木の花って本当は真ん中にあるあの緑色の目立たないのが花なんだよ。」
「えっ、そうなの？。」
咲良は目を細め、切なそうな顔で教えてくれた。
僕はそんな咲良の顔を見てると、咲良がとても近親相姦なんて事をするような子には思えなかった。
人は見かけによらない…。
そんな言葉が頭に浮かぶ。
「なんか、この道隔てて白色と赤色の花水木なんて、けして触れ合

う事のできない男の人と女の人みたいだね。」
と、咲良は言う…。
「あー。」
「なんてね。」
「はは…。」
咲良の意味深な発言と咲良。
けして触れ合う事のできない男女…。
僕は咲良という女の子がミステリアスに感じ、僕の頭はまた変になりそうになった。

一緒に花水木を見てから、僕と咲良は会えばよく話し学校へもよく一緒に行き帰りするようになり、呼び名もいつしか『砺波くん。』から『瞬くん。』、『妻夫木。』から『咲良。』へと変わる。
きっと、普通なら近親相姦をするような人間を不潔と思い、一緒にいるのも嫌だと軽蔑、敬遠する。
けど、僕はなぜか違う。
あのふたりの行為を美しい芸術の様に感じ、不潔、なんて言葉で片付けたくないと思った。
僕は変わってるのか、オヤジか?。
まぁ、そんな事はいいや。
「なんか喉乾いた、ジュースでも買いに行こっ。」
机の引出しを開け、財布をジーンズのポケットに入れ、僕は窓の外を見た。
「あっ。」
春の夜風に揺れる桜色のレースのカーテン。
「咲良…。」
実の兄に愛撫される咲良。
咲良は…あのふたりは、何を思い、何を感じて、世間ではタブーとされる行為の海に身を泳がすのか?僕は知りたいと思う。

あの時の様にまた窓から消えていくふたり…。
「あ、そうだ…ジュース、飲みたかったんだ。」
僕は、何も見てなかった様に部屋を後にした。

茜。

自販機でジュースを買い、僕はゆっくりと歩く。
5月の中旬なのになんて暑いんだろう…もう、夏が来たのか?。
「花水木…もう、終わりだろうな。」
ちょっとセンチメンタルな気持ちになる。
普通は夏の終わりとか、卒業シーズンの辺りになるとそういう気持ちになるんだと思うけど、
不思議と僕はこの花水木の花の時期が終わりを迎えようとするこの時期に、なぜか、なる。
ふと、咲良の家を見る。
咲良の部屋の明かりはまだついているようだ。
僕は大きくため息をつき、自分の家の門のドアを開けようとした時、何処からかすすり泣く声がした。
「…。」
僕は、ドアを開けるのを止め声がする方へ歩く…。
泣いていたのは、茜ちゃんだった。
座り込み、顔を埋め泣いている。
「茜ちゃ…ん?。」
「ひっく。」
茜ちゃんは僕の方を見ようとはしない。
「茜ちゃん…。」
「…。」
僕は茜ちゃんの隣に座り、茜ちゃんの頭をそっと撫ぜる。
「茜ちゃん…も、見たの?。」
茜ちゃんは小さな声でそう聞いた僕の言葉にびっくりし、僕の顔を見た。
涙でぐしゃぐしゃの顔…いつも明るく元気で煩いぐらい喋る茜ちゃんの泣き顔を、長い間お隣さんをしているが初めて見る。

「しゅ、瞬…も…知っ…て、たの？。」
震える詰まった言葉にならないような声で言う。
「うん。」
「っく…そう…なんだ…。」
苦笑いする茜ちゃん。
「…。」
「そうだよね、見えるよね？。あんなにオープンにされてたら…イヤでも見えるよね？。」
「うん。」
「でも、なんであんなに綺麗なんだろう？。」
泣きはらした顔で咲良の家を見つめる茜ちゃん。
僕と同じ事感じたんだ、あのふたりの行為を綺麗と感じたんだ。
「…。」
「あんな綺麗な姿見せられたら、私…。」
「茜ちゃん？。」
「ひなたくんに…うんん、ごめん、なんでもない。」
どんな気持ちなんだろう？、彼氏とその妹の行為を見て、どんな気持ちがするんだろう？。
僕だったらきっとはらわたが煮え繰り返りそうな感じがすると思うけど…。
「茜ちゃん？。」
「うん？。」
「あ、なんでもない。」
聞けない…こんなに泣き腫らした顔の茜ちゃんに聞けるわけがない。
「私、中入るね。」
立ちあがる茜ちゃん、ほのかにいい匂いがする。
「あ、うん。おやすみ。」
「おやすみ。」
僕も立ち上がり咲良の家を見つめ家に戻る。
咲良の部屋の電気はもう…消えている。

初夏…霧雨のナカ…。

花水木の季節も終わり、制服は冬服から夏服に変わる。
僕達男子にはちょっと嬉しい時期が来た。
女子の白い半袖のブラウスから透ける身体の線がなんともたまらなく、後姿でも制服の中を想像してしまう。
「瞬くーん。」
僕の名前を呼び咲良がかけて来た。
「どうしたの、咲良?。」
「一緒に帰ろうよ。」
「うん、いいけど。」
ニッコリ微笑む咲良。
最近、クラスの男子の中では咲良の話で持ちきりだ。
夏服を着た透き通るほど色の白い綺麗な咲良。
みんな咲良とやりたいと思っている。
僕は…。

「なんかこの時期って嫌だなぁ…。」
咲良は曇った空を見上げ、気だるそうな顔で言う。
「どうして?。」
「汗…かくし、雨があまり好きじゃないのね私…。」
「雨か…そうだね。」
僕もあまり好きじゃないな。
「私、春が一番好き。ねぇ、瞬くん、私の部屋のカーテン桜色なの知ってる?。」
「えっ?。」
咲良が聞いた桜色のカーテンの事に、僕は動揺しそうになったがそれを必死で隠す。
…咲良の部屋のカーテンが桜色なのは知ってる。

「綺麗な桜色のカーテンなんだよ。」
ニコニコ微笑む咲良の顔を見て僕は、咲良の部屋の桜色のレースのカーテンが夜風に靡く事も咲良と咲良のお兄さんとの行為も知ってる、と心の中で呟く。
げど、
「ふーん、そうなんだ。気づかなかった。」
僕は知らないフリをする。
「ねぇ、瞬くんちょっと寄り道していかない？。」
「ん？。」
咲良は僕が返事をする間もなく僕の手を握りしめ走り出した。

僕はまた、咲良に手を引っ張られ　どれだけ走っただろう？。
咲良は隣町のある公園で足を止めた。
「はぁ、はぁ…ここ。」
「んはぁ…咲良、意外と足が速いんだね。」
僕は唾を飲み込み辺りを見回す。
公園を囲むようにして綺麗に植えてある藍色の紫陽花が見事な花を咲かせている。
「綺麗…。」
「でしょ？、私この時期は嫌いなんだけど、この時期に咲く紫陽花はすごく好きなんだ。」
瞳をキラキラさせ、嬉しそうに話す咲良を見て僕もなぜか嬉しくなる。
「雨に濡れるともっと綺麗に見えるんだろうね。」
「そうだね。雨は嫌いだけど、雨に濡れるここの紫陽花…瞬と一緒に見てみたいなぁ。」
「…。」
僕と見てみたい？どうして僕なんだろう？…僕はふと、そう思った。
咲良ならいい男すぐできると思うし…なんで、僕なんだ？そんな疑問が沸いてくる。

こんな勉強しかできない男。咲良の兄貴とは比べ物にならないくらい背は普通だし、顔もカッコ良くない、ただ普通の僕。
「瞬くん。」
「…。」
「瞬くん?。」
僕を呼んでいる咲良の声に気づかないで、ただ黙って紫陽花を見ながら考え事をしている僕の顔を不思議そうに覗く咲良しのドアップの顔に僕は驚いた。
「わぁぁ…。」
「ひどい、そんなに驚かなくてもいいのに…。」
少し膨れた咲良の顔。
僕は、ある事が気になり、咲良に聞いてみる。
「咲良は、好きな人…いるの?。」
「えっ…?。」
「あっ、ごめんっ、ごめん。」
咲良はまた不思議そうな顔で僕を見てる。
なぜか知らないけど無性に恥ずかしくなった僕はその場を離れようとした。
わ、どうしよう?…変なこと聞いた。
なんで聞いたんだ…。
歩き出した僕の手をぎゅっと握り締める咲良。
「瞬くんっ。」
「あ、雨が降ってきた。」
空を見つめる僕…。
空から優しい霧雨が僕と咲良を濡らす。

「瞬くん。」
(あ…。)
僕を呼んだ咲良の顔を見た僕に咲良は、そっと、キスをした。
足のつま先から頭の天辺まで走る、痺れのような感じ。

なんなんだろう?…この感じ。
１５年間生きてきた中、初めて感じたなんとも言えない感じ。
僕の産まれて初めてのキス。
「咲良…?。」
「瞬くん切ない顔…してる。」
微笑む咲良…。

白いシャツとブラウスから…透けるふたりの肌…。

僕と咲良は手を繋いだまま、公園の片隅にある運動場の備品庫に向かう。
その後の事はあんまりよく覚えていない。
ただ覚えている事は、人の身体がこんなにも温かくて、こんなにもサラサラして、気持ちがいいんだという事…。

初夏…霧雨のナカ…。（後書き）

高校生の男の子ってどんな感じなんでしょうか？。
よく分からない…。
きっと、瞬のような感じの男の子はいないんだろうなぁ…。
よかったら感想お願いします。
ＰＳ．霧雨、季、秋でした。（失敗）

想い出す…。

僕と咲良は手を繋ぎ、びしょびしょの濡れた制服のまま家に帰った。
僕はリビングには入らず、家族に気づかれないようにそーっとバスルームに直行し、洗いたくないと思ったけど、シャワーを浴びる。

咲良…の身体に触れた。
咲良を感じた…身体に稲妻が走ったかと思うほど感じた。
僕のこの唇が咲良の身体を愛撫した。
温かいサラサラした人の肌の感触…昔、母さんに抱っこされた時以来の触れ合い。
僕の…が…咲良の…。

幸せを感じる。
咲良が女で、僕は男。
いつも以上それを感じた。
幸福な時間(とき)だった。

次の日…今日も雨。
朝から物凄い勢いで降ってくる雨。
いつ梅雨明けするんだろう?と…思い、ズボンの裾を濡らしながら学校までの道を歩く。
今日は、珍しく咲良も咲良の兄貴もいない。
(どうしたんだろう?。)
気にはなるけど、まぁいいや。で片付け、下駄箱で立ってる生活指導の先生に会釈をし、僕は教室に入った。

ホームルームが始まり、
「今日の欠席者は妻夫木一人か？。」
先生の声で、咲良の席を見る。
咲良は欠席。
「なんだ、つまんね。」
クラスの男子が口々に言う。
「先生～、妻夫木なんで休みなんですか？。」
「あー、風邪だ。」
風邪…ひいたんだ。昨日、雨に濡れたからな…あっ…。
ふと、昨日、あまりの緊張に覚えていないはずの咲良の裸体を思い出す。
あ…。全身の血が急上昇、顔が真っ赤になるのが分かる。
「昨日、雨に濡れたのか？、お見舞い行こうぜぇ、瞬。」
そんな僕の背中を、隣の席の一ノ瀬寛太がバシンッと思いっきり叩く。
「ふぐえっ。」
「えっ？。」
僕が発したとんでもない声に教室は一気に静まりかえった。
し、しまった…。
「…。」
「ど、どうした？砺波顔が真っ赤だぞ！。」
「あ、いえ、大丈夫です。」
やっぱり顔が真っ赤なんだ…。
クラス中の視線が僕に向いている。
うわぁ、あんな事思い出した僕の顔…みんな見ないでくれ。
そんな気持ちで顔を机に伏せた僕に先生はまた、
「砺波、保健室行って来い。」
「は、はい…。」
「瞬、大丈夫か？。」
「な、なんとか…。」

なんとかこの場から抜け出せれる…身体は至って健康だけど、僕は病気のフリをして教室を出た。

ホームルームの時間は授業と違って先生と生徒が楽しそうに話している。

廊下を真っ直ぐ歩く僕の耳に強い雨音と色々な声が交差する様に聞こえる。

窓の…外を見る。

４本の紫陽花が無造作に植えられている。

学校にも、紫陽花が咲いてたんだ。

紫陽花と咲良。

僕はまた、咲良の天(そら)に向かって伸びる綺麗な首筋から顎のラインと深い眠りに導いてくれる様なそんな咲良の優しい声を思い出す。

「はぁ、僕、ダメだぁ…頭が咲良で…いっぱい。」

僕は咲良の何かに獲りつかれた。

咲良なしでは生きていけなさそう…大袈裟だけど…そう、思う。

保健室にに向かう教室が、今日はやけに遠く感じる…。

ふたつの花の温度。

勢いよく降る雨音が心地良いのと、昨日あんまり眠れなかった事で、
気がつくと僕は長い時間保健室で爆睡してしまった。
咲良、何してるんだろう？。
寝ても起きても考えるのは咲良の事。
今日、学校で教室にいたのは朝と帰りのホームルームだけ…。
なんかほんとうに頭が痛い。
病気じゃないのにあんなに寝たからきっと痛くなったんだ。
まだ半分寝ている少し痛い頭を押さえ、下駄箱でスリッパを脱ぎ靴に履き替えた僕を、
「瞬。」
茜ちゃんが呼び止めた。
「…。」
「一緒に帰ろう。」
僕の顔を見てニッコリ微笑む茜ちゃん。
「あ、うん。」
あの時から茜ちゃんとは会ってなかった。
僕の前で立っている茜ちゃんは、なんか活発で健康的な茜ちゃんと言う感じはなく、痩せてどこか疲れている…そんな感じがする。
眠れないんだろうな、仕方ないか…普通だったらそうだよな？。

「今日、咲良ちゃんは休みなんだね？。」
「あ、うん。」
「瞬、淋しいでしょ？。」
「え～？、そんな事ない。」
僕は照れ隠し、開いた傘で顔を隠す。
「ふふ、瞬はいつまで経っても可愛いね。」

「いつまでも子供扱いすんなよ。」
二人がさした傘に集中攻撃してくる様な強い雨。
僕は子供扱いする茜ちゃんにそっと意地悪を言ってみた。
「茜ちゃんだって、咲良の兄貴がいないから淋しいくせに…。」
僕はすねた顔で歩きながら茜ちゃんを傘の横から覗き見ると、茜ちゃんは冷めた顔で、
「…ない。」
雨音で聞こえない…。
「茜ちゃん?。」
「淋しくないったらっ!。」
急に耳元で大声を上げる茜ちゃんに僕は驚いた。
「あ、そうなんだ、ごめん。」
「あ、私のほうこそ…ごめん。」
謝る茜ちゃんの瞳に薄っすら浮かぶ涙。
「茜ちゃん…大丈夫?。」
「ごめん、なんか瞬と話してたら…私、今…いっぱいいっぱいで…。」
「茜ちゃん…。」
いっぱい、いっぱいで…。そう言い傘で顔を隠し、必死に泣くのを我慢する茜ちゃんを僕はなぜか愛しいと感じる。
それは、咲良を愛しいと想う感情とは違う感情。
「瞬…。」
「ん、何?。」
「瞬、さっきいつまでも子供扱いすんなって言ったよね?。」
「あ、うん。言ったよ。」
茜ちゃんは傘を上げ、僕をじーっと見つめると、
「お願いがあるんだけど聞いてくれる?。」
「何?、うん、いいよ。」
何にも考えないで、軽くニッコリ　うん　と答えた僕の手を引っ張り茜ちゃんはまた歩き出した。

「今日、家誰もいないから…ちょっと上がってて。」
「うん。」
「服、着替えてくるから先に私の部屋行ってて。」
「あ、うん、お邪魔します。」
僕はなんの躊躇いも無く、ただ幼馴染という間柄もあり何も考えずに茜ちゃんの部屋へ上がって行った。
「あ～、久しぶり。」
茜ちゃんの部屋を見渡す。
昔置いてなかったドレッサーには、いろんな香水のボトルとリップが沢山並べてある。
「ふ～ん、女の部屋ってこんな感じなんだぁ。」
茜ちゃんが高校生になるまではよく来ていたけど、茜ちゃんが高校に上がってからは一度も来た事がない部屋。以前は平気に座れたベットの上に今は座ってはいけないと思う。
ただの隣の幼馴染のお姉ちゃんの茜ちゃんに女を感じた瞬間。
「おまたせ。」
「あっ、やったぁ～チョコチップクッキー！！。」
僕が大好きなチョコチップクッキーと氷が沢山入ったアイスティーを少し重そうに持って茜ちゃんが部屋に入って来た。
「瞬、好きでしょ？。」
勉強机の上にトレーを置いて、髪をそっと上げた茜ちゃんの姿に僕は目を奪われる。
丁度いい感じの綺麗な健康的な肌に薄い水色のキャミソールにハーフパンツ…。
茜ちゃんってこんなに色っぽかったっけ？。
「あ、うん。」
どうしたんだろう僕…。
ドクンッ…ドクンッ…、ドクンッ…。

茜ちゃんの姿に僕の心臓は早く動き始める。
「はい、瞬。」
茜ちゃんが僕に渡すグラスの中に入った綺麗な氷が涼しい音をたてる。
震える手。ダメだ…僕、今茜ちゃんを女として意識してしまっている。
ダメだ…ダメだ…瞬っ、茜ちゃんはただの幼馴染だよ。僕…僕は…。
頭の中で、必死に普通の僕と普通ではない僕が格闘している。
うお…頭が壊れるぅ～。
「瞬、どうかした？。」
茜ちゃんは不思議そうに変な瞬、という顔をしている。
僕は頭を大きく左右にブルブルっと振り、
「う、な、何でもないよ。」
「変な瞬。でも、可愛いね。」
グラスの氷をストローで上手に取り、口にいれる茜ちゃん。
「もぉ、子供扱いすんなって言っただろぉ？。」
「うあはは、ごめんね。」
頬を膨らませ口の中で氷をガリガリ割り食べ終えた茜ちゃんは真剣な眼差しで、
「瞬…は、もう、子供じゃないんだよね？。」
「お、おおぅ。」
「じゃぁ、…抱ける？。」
「は？。」
だ、抱けるって、何を？。
考え、首を傾げる僕。
ドッシッンッ。
茜ちゃんがいきなり僕を押し倒し身体の乗りかかってきた。
い、いった～い。
「あ、茜ちゃん？いきなり痛いよ、プロレスは…僕嫌いだから…。」
「プロレス？、あは、瞬可愛い～あはは。」

あ、茜ちゃん、壊れてる?。
「もぉ、子供扱いすんなよっ。」
膨れた僕の顔を見て、茜ちゃんはまたケラケラ笑い出す。
「あはは、ごっ、ごめん。しゅ、瞬、お子ちゃまなんだもん。」
「もぉー。」
あまりにも笑い、いつまでも子供扱いする茜ちゃんに僕は苛立ち茜ちゃんを身体の上に乗せたまま、
今度は僕が上になる様に、身体を半回転させた。
「きゃぁ。いきなり、びっくりするなぁ…もぉ…。」
「いつまでも子供扱いすんなよ。」
冷めた低い口調で言った僕に驚いた茜ちゃんの顔から笑みが消える。
「あ、ごめん…。」
「もう、すんなよ。」
そう言い、茜ちゃんの上から降りようとした僕の襟ぐりを両手で掴み茜ちゃんは僕を自分の身体に引き寄せる。
「うぉ。」
痛っ。
フローリングでそっと鼻を打つ。
痛いのと柔らかい感触…。
茜ちゃんのいい匂いがする…。この間と同じ匂い。
甘酸っぱい…いい匂い。
僕はそっと顔を上げ、茜ちゃんを見つめそっとキスをした。
「瞬、そんなキス…できるんだぁ。」
「だから子供扱いすんなって。」
「ごめん…。」
「…。」
「ね、しよ…。」
「…。」
咲良とは当たり前だけど違う肌の温もり…。

止める事のできない、欲情。
目の前にある獲物(はな)を見ないフリはできない…そんな年頃?。
小さい頃からよく知っている隣のお姉ちゃん…小さい頃は一緒にお風呂にも入った事がある幼馴染のお姉ちゃん。

僕は、今、そんな茜ちゃんを抱いている。

僕は蝶。

「おはよう、瞬。」
門を開けた所で、茜ちゃんに声をかけられドキッとする僕。
「お、おはよう。」
「ふふ、眠そうね。」
茜ちゃんの顔がまともに見れない僕に対し茜ちゃんは何とも無いような顔で接する。
そりゃぁ、眠いさ。
茜ちゃんと目が合わない様に僕はそっと茜ちゃんを見る。
意識してしまう…。
「はぁ〜、なんかよく眠れたぁ…。」
今日の晴れた天気と同様すっきりした気持ち良さそうな茜ちゃん、背伸びなんかしてる。
もちろん茜ちゃんには僕に恋愛感情が無い事は知っている。
僕は久しぶりの煩いくらいの茜ちゃんの話を聞きながら茜ちゃんと学校までの道のりを歩く。

僕と違って、意識の意の字も無いすがすがしい顔の茜ちゃんの忙しい話しと別れ、
「瞬くん、おはよう。」
朝、下駄箱で今度は咲良に呼び止められる。
僕は咲良の顔も茜ちゃん同様意識し見れなかった。
咲良は三日も学校を休んでいた。
お見舞いに行こう…と思っていたが、それどころではなくなっていた事は言うまでも無い。
咲良と茜ちゃんが僕の頭の中の水槽で揺ら揺らと泳いでいる。
「お、おはよう。よ、良くなったんだ…。」

「うん。瞬くんは風邪ひかなかった？。」
うわぁ、今の質問…思い出す、あの時…。
顔から火が噴出しそう。
「ぼ、僕は、馬鹿だから風邪ひかないんだ。」
な、何を言っている僕、馬鹿みたいじゃんか？。
「やだぁ、瞬くん変。」
「そ、そう？。」
「ふふ。」
笑う咲良。な、なんか苦しい…。
背中に感じる咲良の気配が僕を呼吸困難へと落とし入れようとする。
「はぁ…。」
咲良に気づかれない様に小さくため息をついて教室まで歩く。
あ～、今日は朝から心臓に悪い。
僕と寝て事なんてまったくなんとも思ってない様な二人を羨ましく思う。
「瞬くんっ、教室ここだよ。」
咲良はニコニコして僕を呼び止める。
「あ。」
「大丈夫、やっぱ風邪ひいてるんじゃない？。」
覗き込む咲良顔…。
あ～今日も保健室に行こうかな？。
僕はそう思う。

花弁の隙間を…。

最近は雨も降らず、異常気象の為か、さんさんと太陽が僕を照りつける。
「暑いっ！。」の一言が今の口癖。
咲良とも茜ちゃんともあれからなんの進展も何にもないまま現在まで至っている。
今は目の前にある初の期末テストと言う大事なテスト勉強をするのには何も無いのがいいのかも、と思いながらも、僕はあの二人にとってなんなんだろう？と頭を抱える。
「はぁ～。」
これは僕に対してのなんのテストだろう？。
問題集の分からない問題と自分の周りの分からない人間（おんな）。
僕はもうおしまいだ。
そんな時携帯電話の着信音が僕を呼ぶ。
「はい。」
「瞬っ、勉強してた？、ごめんっ。１年の数学の問題集ちょっと貸して！！。」
「あ、うん。いいよ。」
「今から取りに行くから、バイっ！。」
相変わらず煩い感じの茜ちゃん。
あれからなぜか吹っ切れた様子でいつも元気がいいもとの茜ちゃん。

茜ちゃんは１分もしないで僕の家の階段をバタバタと登って、僕の部屋へと来る。
「ごめ～んっ、瞬っ！。」
あ、騒がしい。
「いいよ、別に…ついでだからここ教えてよ。」
「あ、うん。いいよ。」

僕は勉強机の上の問題集をシャープペンシルで指す。
「あ〜、これね、ちょっと待ってね。」
頷きながら問題を読む茜ちゃんの首筋を見て、僕はドキッとする。
あ、いかん、いかん。そう思い、ふと目を窓にそらした僕の目にまたあの光景が映った。
今日は風がなく靡いていない少し開いた桜色のレースのカーテン越しの、咲良と兄貴ひなたの行為。
「あ…。」
僕は思わず声を発してしまう…。
「瞬？。」
僕が口を開かなければ、多分気づく事はなかっただろう茜ちゃんが僕の視線の先を見た。
咲良のすーっと綺麗に伸びた首筋にキスをする咲良の兄貴ひなた。
少し開いた桜色のレースのカーテンとその隙間に交互に変わる咲良の裸体。
僕と茜ちゃんはそんな二人の行為をただ黙って視線もそらさず見ていた。
しばらくして兄貴ひなたは急に動きを止め、
「…。」
咲良は座り込んだ。
レースのカーテン越しとはいえ、明るい電気の明かりは人の表情までとはいかないけど、何をしてるのかがはっきり見える。
「瞬。」
涙も流さず茜ちゃんは僕の名前を呼ぶ。
「何、茜ちゃん。」
「うんん、何にも無い。」
「そう…。」
ただ、ただ、会話にならない会話で、今も外をぼーっと見る僕と茜ちゃん。

しばらくして、茜ちゃんの携帯電話と僕の携帯電話の着信音が鳴る。

悲しいほどフシギな感覚の棘とそれを守りたい優しい兄。（前書き）

性に関して、傷つき思い出したくない過去がある人はご遠慮ください。

悲しいほどフシギな感覚の棘とそれを守りたい優しい兄。

僕は咲良の部屋に呼び出される。
初めてあがる咲良の家。
両親は忙しく外国と日本を行ったり来りでほとんどいない状態。
家が初めてだから当然咲良の部屋も初めて入る。
「瞬…くん。」
薄く笑みを浮かべ僕を呼ぶ。
「な、何?。」
「さっきの…。」
「あ、ああ。」
「私と、お兄ちゃんが何してたか…見てた?。」
僕はそっと頷く。
「なんか、あんまり驚いてないね…もしかして、瞬くん…。」
目に涙を浮かばせる咲良。
もしかして…何を言いたい、何を僕に聞きたいの?。
「何?。」
「ずっと前からしっ…てた?。」
「うん…ずっと前から知ってた…よ。」
「あは、そう…なんだ…。」
咲良の両頬に涙がすーっとつたった。

咲良は自分と咲良の兄貴が繰り返していた行為を僕が知っていた事を知ると、
薄い桜色のレースのカーテンを見つめ話し出した。

「中3の夏の雨の日にね、私、友達の家から帰る途中二人の男に犯されたの。」
咲良の話し始めた衝撃的な言葉の話に僕は驚きを隠せなかった。

「すごい雨だった、いつも中学に通う道を傘をさしながら歩いてたら気づかないうちに二人の男に前と後ろを挟まれてて…。」
咲良は震え、泣きながら話しを続ける。
本当なら、やめろとか聞きたくないとか口にするんだろうけど僕はあまりの驚きに言葉を出す事ができなかった。
「雨の中、傘を取りあげられてそのまま川の方に引っ張られて押し倒されたの。一人の男が抵抗する私の両手を捕まえて、もう一人の男が私の太股の上に乗っかって、物凄く怖くてこのまま死んでいいって思った…。けどね不思議なの、何でだか分からないけど、二人目の男にされる時にはもう私の身体はそれに慣れていって気持ちがいいって感じたの。」
僕は咲良が話す生々しい悲しい過去にまだ何も言葉を発せず、ただ、ただ聞いていた。
今、僕はどんな顔してるんだろう…どんな顔して咲良の顔を、話しを聞いてるんだろう?。
咲良は静かに涙を流しながら僕の顔を見てニッコリ微笑むと、
「私、変でしょ?、頭では怖いって思ってるのに身体は感じてるの…気持ちがいいって思ったの。男達はコトが終わるとさっさと帰って行って、私はしばらくその場で泥まみれのままぼーっとしていたの。そしたら心配したお兄ちゃんが迎えに来てくれた。」
「咲良…。」
僕がやっと発した言葉は咲良の名前だった。
「家に帰ってシャワーを浴びて、あの等身大の鏡にこの汚い自分の裸を映してたの。なんて身体なんだろう?。あんな時に感じるなんて…私悲しくて、ずっと見てたら心配したお兄ちゃんが部屋入ってきて、私、お兄ちゃんを見て思ったの…したいって。私が『さっきの事忘れたいから抱いて。』って言ったら、お兄ちゃん『お前の身体は俺が綺麗にしてやるから。』って優しく抱いてくれた…。それが私達の始まり。」
これは何かの小説かというぐらいできた話に僕は寒気を覚え、また

言葉を失った。
「軽蔑した…でしょ?。」
軽蔑?軽蔑はしてない…初めて二人の営みを見た時も、不潔と思わず敬遠もしなかった。
むしろすごく綺麗な光景に心奪われたくらい。
あの綺麗に感じた光景はこんな惨くて悲しい出来事を忘れたいと思う妹と、傷ついた妹を守り綺麗にしてあげたいと思う兄心に思えた。
僕は咲良の顔を見てそっと首を横に振った。
なんて言葉かければいいんだろう?、そう考え僕は、
「どんな咲良でも、僕は好きだから。」と言い、
泣きながら嬉しそうに微笑む咲良をぎゅっと抱きしめた。

悲しいぐらいにフシギな感覚の妹とそれを守りたい優しい棘。

リビングのソファーに座るひなた。
「知ってたんだ…。だから茜、俺を避けてたんだ。」
「…。」
切なそうにに言うひなたを私は見つめた。
否定できない。
好きで好きでたまらないひなた。
知った今でも、そう…狂いそうなほど大好き。
「軽蔑しただろう？。するよな、フツー。」
「…。」
うんともしないとも言えない私。
「俺、隣に住んでた咲良の母さんの事が幼稚園の頃好きだったんだ…。」
なんの話しなんだろう？。
ひなたは切なそうに、でも少し微笑みを浮かばせながら話しを続けた。
「俺の父さんと咲良の母さんが再婚する事になって4人の生活が始まったんだ。いつもただ可愛いって思ってた咲良が一緒に暮らしていくうちにどんどん大好きな咲良の母さんと瓜二つになっていって、俺、いつの間にか咲良を大切に想う様になってたんだ。そんなある日、帰りが遅い咲良を心配して捜しに行ったら、あいつビリビリの服のまま、川岸でぼーっと座ってるんだ。どうしたのかって聞いたら、二人の男に襲われたって…。」
「…。」
私ははじめひなたがなんでそんな事を話すのか分からないで、黙ってひなたの話しを聞いた。
「大切な咲良をこんな目に遭わせて、死にたいほど悔しかったよ。」
「…。」

「俺、あいつが死んじゃうんじゃないかって気が狂いそうなほど心配であいつの部屋に行ったんだ。
そしたらあいつ全裸の自分の姿を鏡で映してて、俺に言うんだ…「忘れたいから、抱いてって。」
綺麗だった、あいつの身体…。。傷ついたあいつの心を守ってやりたかった。あいつが望むなら俺はこうやってあいつを守ってやろうって…咲良のこの傷を癒せるのは自分しかいないって、俺はなんの躊躇いもなくあいつを抱きはじめた。」
「…。」
「俺は妹を守りたかった。」
「…。」
「あいつは妹、咲良は大切な妹だよ。俺はお前が好きだから。」
真剣な眼差しで私の事が好きだと言ってくれるひなた、でも、咲良ちゃんへの愛情と私への好きの重みが比べ物にならないくらい違うって事が分かる。
「ひなた、それは違うと思う。あなたは咲良ちゃんを愛してるんだよ。だって、血の繋がった兄妹じゃないんだもの。あはっ、なんかおかしい。」
「茜?。」
「私、今ひなたと咲良ちゃんが本当の兄妹なら良かったのにって、思っちゃった。本当の兄妹なら違った意味で結ばれないから…。」

聞くんじゃなかった、話して欲しくなかった…近親相姦じゃなかったという事よりも、咲良ちゃんの辛い過去、一番傷ついた彼女…その咲良ちゃんを守りたいと兄心のつもりのひなた。
ひなたは気づいていない咲良ちゃんへの兄妹以外の感情を…。
「茜?。」
血の繋がっていない妹への物凄い愛情を私は感じる。
なんかすごく切なくて、すごく苦しい。
咲良ちゃん以上には私はきっとなれない…。

だから、
「ごめんなさい。私…、もう、ひなたと付き合えない。」
遠まわしにされた好きな人の好きな人への愛の告白。
私はひなたに別れを告げ、部屋を飛び出した。

フラフラと歩いて、気づいたら学校へ来ていた。
なぜだか分からないけど涙も出ない。
どうしてこんな所に来たんだろう?。
薄暗い電灯に照らされる校門。
1年の春、ひなたに一目ボレした私はここに朝早くひなたを呼び出し告白。
こんな目立つ所に呼び出すなんて…今思うと笑っちゃう。
今でもはっきり覚えてる。
あの時の、ドキドキした感じ、優しいひなたの顔、ひなたの優しい『いいよ。』の声。
好きで好きでたまらないよ。
私は校門を登り、保健室の一番角のベットの置いてある所の窓をよくサボリで寝ている生徒が開けておくらしく、たまに開いていると聞いた保健室の窓が開いていないか私は確かめる。
「開いてる。」
窓をそっと開け、少し怖いくらいの静かな保健室のベットで私は横になる。
怖いくらいの静けさが今の私には丁度いいのかも…。
ひなたは追っかけてくれない。
しばらく寝れたのに…また眠れない日が来るのかな?。
そっと目を瞑る。
意識が、遠く…遠く…深い眠りにつきそうなそんな感じの時、私の携帯電話の着信音が鳴る。

茜色の花。

わぁぁ。
こんな静かな所で…。
普通のボリュームの着信音が倍近い音で辺りに鳴り響く。
「はい」
『茜ちゃんっ！、今何処？』
心配そうに慌ててる瞬の声。
「何処だと思う～。学校の保健室」
何もないよ、の声で話す自分。
『なんでそんな所にいるの？』
「静かでいいよ～。瞬もおいでよぉ～」
『分かった！。今から迎えに行くからそこいてよ』
えっ。
「…」
瞬の声を聞くとなぜだか自然に涙が出る。
「優しくしないでよぉ～。あの馬鹿ぁ」

僕は急いで茜ちゃんを迎えに走る。
咲良の兄貴は茜ちゃんを追いかける事もしないでただ、『部屋を飛び出して行った』と言う。
なんて男なんだ。無責任にもほどがある…自分の彼女ぐらい責任持てよ…そう思う。

コンコンッ。
窓を叩く僕に気づくと茜ちゃんは保健室のドアを開ける。
「はぁ…はぁ…。茜ちゃん？、よく入れたね」
「瞬、あの噂は本当だよ」

そんなのん気な事言ってる茜ちゃん。
元気そうで良かったと安心する。
「こわ～、よくこんな所に一人でいたね」
しーんと静かな不気味とも思える保健室。茜ちゃんがいたのが理科室と音楽室でなくて良かったと小心者の僕は思う。
「このくらいの静けさが今はいいの」
小さな声で茜ちゃんは言った。
「…」
月明かりで微かに見える茜ちゃんの顔の表情…。
「ねぇ、瞬知ってた？」
「ん、何を？」
「ひなたと咲良ちゃん…本当の兄妹じゃないんだって」
「…」
本当の兄妹…じゃぁ…ない？。
えっ？。
「あはっ、びっくりでしょ？」
本当の兄妹ではない…って言う事は…んんん…つまり…。
なんか頭が…。
なんか複雑な話になりそうだ…そう思いながら、なんなんだと思いながら…今の現状をよく理解できないまま僕は、
「そうなんだ…」と、だけ呟いた。
　でも少し経つとこんがらがった頭の中の片隅で、本当の兄妹と言う言葉が僕の心臓を締め付けながら暗闇へと連れ込む。
徐々に感じるショック。
心臓の鼓動がバクバクと大きく早く打つのが分かる。
「瞬？」
「…」
放心状態の僕。
「瞬」
ぼーと立ち尽くす僕に茜ちゃんはそっとキスをする。

「あか…ね…ちゃん？」
「私ね、なぜだか分からないけど、瞬がいたからひなたと別れられた」
「茜ちゃん、咲良の兄貴と別れたの？」
「…うん」
僕は咲良と付き合ってもない、ただ成り行きで寝ただけの存在。
同級生以上友達未満。
ご近所さん以上友達未満。
僕ってなんなんだろう…？。
告白をした訳でもないのにこっ酷くフラレタ感じ。
『瞬がいたからひなたと別れられた。』
茜ちゃん…。
「辛い時はいつでもそばにいてあげるから…」
「瞬」
「僕が慰めてあげるから」
「瞬…」
そっと茜ちゃんにキスをする。
傷ついた僕達…。
一緒に慰め合おう。
傷を癒そう。
僕と茜ちゃんはその夜、月に明かりに照らされた薄暗い静かな保健室で二度目の愛ない行為をした。

咲良色の花。

心から本当に好きだと想える人。
クラスの中では普通でおとなしくてあんまり目立たない彼。
でも、心が温かくて一緒にいると安心する彼。
私の事を何もかも知った上で好きと言ってくれた瞬くん。
私はこれから瞬くんとだけ…瞬くんだけを見ていく。
これが私の初めての恋。

私はお兄ちゃんのひなたとは血が繋がっていない。
6歳まではマンションの隣の部屋に住む隣のひなたお兄ちゃんだったが、ある日突然、うちのママとひなたお兄ちゃんのパパが結婚する事になり、私は佐々木咲良から妻夫木咲良になり、二人家族から四人家族になり、一人っ子から二人兄妹になった。
お兄ちゃんはスラッとした身体に肌は程よく小麦色、整った綺麗な顔立ちをしていて、中学校の時（今も）よく羨ましがられ私はお兄ちゃんの妹になれた事がすごく誇らしいと思った。
そんなお兄ちゃんは私にいつも優しい。
そのいつもの優しさが私に起こった事件で、より一層強い優しさを感じる事になる。
怖さより、感じた気持ちよさをもう一度感じたくて、口にした言葉。
気持ちよさのが強かった自分を苛めたいと思って言った言葉にお兄ちゃんは優しく答えてくれた。
本当はまさか答えてくれるとは思わなかった。
きっと本当の兄妹なら有得なかったと思う兄と妹のこの関係。
お兄ちゃんはまだ私の傷が癒えていないと思って抱いてくれてると思う。
茜ちゃんという彼女ができても…。
でも、もう…お兄ちゃんとは終わりにしたいと思う。

お兄ちゃんを私から開放してあげないと…。

「お兄ちゃん？」

「ん？」

お兄ちゃんはここんとこ机にずーっと向かって勉強をしている。

テスト中でもあんまり勉強してるとこを見たことないのに…。

「ちょっといい？」

お兄ちゃんは背伸びをすると私の方を見る。

「何、問題集が分からないの？」

「うんん」

いざ顔を見るとなぜだか言えない。

「何、どうした？」

「うん、あのね、私とお兄ちゃんがしてる、その、あれね、もう止め様と思う」

私が言う途切れ途切れの言葉を最後まで聞くとお兄ちゃんは突き刺さるような目で私を見つめる。

お兄ちゃん？。

じーっと穴が開きそうなくらいお兄ちゃんは私を見て、椅子を半回転させ私に背中を向けると、

「嫌だ。」と、一言思わぬ返事が帰ってくる。

「お兄ちゃん、茜ちゃんが可愛そうだよ」

身勝手な私は茜ちゃんの名前を出す。

「茜は茜、妹は妹」

「そ、それに私…大切な人ができたの」

「…」

「だから、お兄ちゃん」

「…」

お兄ちゃんは返事すらしてくれなくなった。

「じゃぁ…」

私は今はこれ以上話はできないと、お兄ちゃんの部屋を後にした。

また、茜ちゃんと寝てしまった。
毎日一人になると考える。
僕は咲良が好きなのに…心より身体か？
慰めるつもりで抱くなら、もっと違う方法で慰めるべきなんじゃないかと思ったりもする。
咲良は僕と茜ちゃんの事、知ったらどう思いどう感じるんだろう？
嫌だろうな…？
僕が咲良と兄貴の事を知った時は…ん？
僕は、変なのかな？
でも、本当の兄と妹ではないと知った今はすごく嫌だと思う。
あれ、本当に僕って変なのかな？
近親相姦のが…平気なのか？
ああ…この暑い太陽のせいで僕の頭は変になってるのか？
「はぁ～、テスト中なのにな」
テスト勉強どころじゃなくなってしまう…。
ああ、どうせ勉強できないんなら寝てしまえっ！
僕はどうなってるんだろう？

最後のテストの日、やっぱり惨敗だ…。
最悪のできだ…しかも数学なんて答案用紙をビリビリに切り裂いてしまいたいほど、サイアクのでき。
「はぁ…」
「なんだよ瞬、最近ため息ばかりだな。」
「最悪。俺死にたい…」
「大袈裟だな…まだ一年だからいいんだよ」
そういう問題じゃなくて…。
「まぁね」
ぐったりと机の上に伸びている僕に、

「瞬くん…帰りちょっといい？」
「うん、いいよ」
意味深な顔で咲良が言う。
ちょっと…。
ちょっと、ってなんだろう～？あ～、もうどうにでもなれ～！！

ホームルームを終え、カバンを持って下駄箱に行く。
咲良が待っていた。
「ごめん、ごめん」
「いいよ、一緒のクラスなのにね。ふふっ」
どうしたんだろう？さっきの意味深の顔と違ってさっぱりした様子の咲良。
「なんかあった？」
「ん？、そう…」
咲良は珍しくモジモジし、
「私…ね、お兄ちゃんとのあの関係はすっぱり切ったの」
「ん、あ、あ、そうなの？」
「だから…」
「ん？」
「瞬くんだけを見ようと思うの…」
「ふーん」
ああ、そうなの…ふーん。
「…」
僕は考えた。僕だけを見るって？、僕だけって事は…つまり…。
「えっ？」
「意味、分かった？」
僕は生唾をごくりと飲み込んだ。
「えっ、あ…つまり…」
こんな事初めてで、戸惑う。
「瞬くん、私と付き合って。」

咲良し恥ずかしそうに頬をピンクに染めて僕に言う。
可愛い咲良が僕の物に…？
僕の好きな咲良…好きな…ん、なぜ？なんでこんな時に茜ちゃんが
僕を見つめる顔が浮かぶ…。
「…」
「瞬くん？」
「咲良…」
茜ちゃんとの事は、言わないべきだよな…？
「瞬くん、私の事本当に好き？」
「咲良…僕と付き合って…」
「うん」
咲良はニッコリ笑うと僕の手をぎゅっと握った。

夏…青い空と輝く太陽。

もうじき、夏休み。
真っ青な空が暑く光る太陽をより一層輝かせて見せる。
僕と咲良は学校の行き帰り、夏休みに何処に行こうかいつも話している。
二人とも異性と付き合うのが初めてで（順序が違う）、咲良は彼氏ができたら行きたかった所がいっぱいあったらしく、
取り合えず近場から攻めて行こうとか、いや夏休みだから電車やバスで行く海とか遠い所から行こうとか色々計画を立てる。
制服を着てカバンを持って話しながら二人で家までの道のりを歩く…当たり前の事だけど、
こうしてると、あんな事をしている時の咲良はすごく大人びいて見えるのに、普段の時はまだ中学生かな思うぐらいの感じがする女の子だった。
やっぱりこんな感じがいいな…そうそう高校生はこんな感じの付き合いだよ！！。
性欲にすぐ負ける自分の事を棚に置いて思う。
「じゃぁ、明日ね」
「うん、明日」
歩道橋の前で手を振り別れる。
階段を降りるまで咲良は僕を歩道橋の下で待っていてくれる。
赤い花水木が咲く道と、白い花水木が咲く違う道を対になる様に歩き、
玄関前でまた手を振り、二人は門の中へと入って行く…。
「ただいま～」
な～んかテレビドラマの見過ぎ～？でも、咲良となら恥ずかしくないや。顔がニンマリする。
「瞬～、瞬ちょっと～」

母さんが呼ぶのを無視して階段を一段抜かしでおもいっきり駆け上がり、
「夏休みは思いっきり楽しむぞ〜！」
ベットにおもいっきりダイブする。
ああ、高校初めての夏休み。
できないかもって諦めてた僕に彼女もできて。
楽しくなりそう〜！
頭の中を金魚が気持ち良さそうに泳いでる。
「はぁ〜」
単純馬鹿単細胞人間の僕には次に起こる事を知るよしもない…。

夏…青い空と輝く太陽。（後書き）

なんか、茜とひなたはどうなったんだろう？
書いてる自分が気になる…。（だったら書けよ！！）
今週いっぱいには完結する予定です。
あともう少し、よかったらお付き合いください。
希凛希。

花が枯れる頃。

ずーっとひなたを避けてる私…。
学校ではクラスが違う事とひなたはバスケ部で忙しい事が救い。
一年の子がひなたに告白した事をまた耳にする。
告白…って聞くたびに、ひなたが私よりその子を選ぶんじゃないかとドキドキした。
でも今は、ひなたは私より告白した子達より、咲良ちゃん一人しか見えてないんだと知っている。
諦め…？が、あるからこんなに冷静にいられるのかな？

「なんか茜最近元気ないね」
「そう？」
「妻夫木と喧嘩でもしたの？」
「してないよ～」
「あいつも最近元気ないらしいよ」
ひなた元気ないんだ…。
「あ、ほら、バスケ忙しいじゃない…疲れてるらしいよ」
「忙しいしモテル彼を持つと彼女は大変だね？」
「あはは…」

モテル彼か…。
他の女の子だったらどうなんだろう？他の女の子なら諦めはつかないのかな？
咲良ちゃんだからかな？本当の妹じゃない義妹だからかな？
もう訳が分からない。
そんな事を考え俯いて歩いてたら、誰かにぶつかった。
「痛っ。」
「あ、すみませ…」

謝り顔をあげるとぶつかった相手がひなただと知る。
「俯いてると危ないぞ！！」
「あ、ごめん」
「俺がお前の前を塞いだ事も気づかなかっただろう？」
優しく笑いながら言うひなたに私はドキッとする。
「うん…」
「ったくお前は。カバン持ってやろうか？」
「いい。あれ、ひなた今日部活は？」
「サボった」
「どうしたの、何かあったの、あっ、もしかして体の具合悪いの？」
ひなたはあれこれ忙しく聞く私をいつもの様に呆れた感じで微笑み、
「もう一度やり直そう」
「えっ？」
私は驚いてひなたから目線をそらした。
「っていうか別れたつもりはないけどね」
「私…」
「俺はお前が好きだから…じゃぁ」
真剣なひなたの顔、ひなたは手を振りまた校門へ入って行く。
「ひなた？」
「やっぱ部活行くよ」
それ言う為にわざわざ待ってたの？
諦めてたひなたを…少し…もう一回信じて…。
みよう…か…な？
そう思いかけた時、私の頭にふとある笑顔が浮かぶ。
それは、瞬の顔。
瞬に相談してみよう…かな？
自分で決められなかったら、瞬に相談…してみよう。

一学期終業式。

これから長～い夏休み！
みんな朝からウキウキの気分でテンションが高い、一応テストの赤点も免れ補習も受けずに済んだ僕もちろん。
明後日、咲良と計画していた海に行く予定。
「では、羽目を外さずに…」
「は～い」

「瞬くん帰ろう」
「うん」
「何処行くお昼？」
「マ〇ドでハンバーガーでも食べようか？」
「うん」
「行こう」
今から咲良と水着を買いに行く。
瞬くんのタイプの水着を選んでと言うけど正直どんなのがいいかなんて…。
僕は、ビキニがいいなんて言えないし…。
ビキニなんて咲良に着させたら他の男にいや～な目で見られるし…。
咲良と歩きながら咲良がいる事を忘れブツブツ頭で色々と考えてたら、
「瞬っ！」
茜ちゃんに声をかけられた。
「あわぁ」
「そんなびっくりしないでよ。瞬、今日暇？」
僕は咲良の顔を見ると、
「あ～、咲良ちゃんと出かけるんだ」
「あ、うん」
「夕方は？」
「うん、いいよ」
「じゃぁ、後で」

「うん」
僕は不思議そうに頭を傾げ、咲良と目を合わせた。
「なんかあったのかな？」
「お兄ちゃんとどうかしたのかな？」

夕方部活を終え、学校から帰ると玄関のドアの鍵が開いている。
「咲良～？」
あれ？返事が無い…。
靴を脱いだ足元を見ると、最近見ていなかったミュールを目にする。
まさかっ！。俺は嬉しくなりリビングのドアをおもいっきり開けた。
「母さんっ！！」
「お帰り、ひなたくん」
優しくニッコリ微笑む母さん、半年振りに会う。
大好きな咲良の…俺の大好きな八重子さんがアメリカから帰って来ていた。
「どっ、どうしたの、お盆に帰ってくるんじゃなかったの？」
いつもの俺と違って声が弾む。
「うん、ちょっと仕事でね。元気で安心したわ」
「母さんも元気そうだね。しばらくいれれるの？」
「うんん、仕事が済んだら早く帰るわ」
「…」
俺は愕然とした。
明後日からバスケ部の合宿で行かなきゃならない。
「お盆には帰ってくるんだろ？」
「うーん、分からない」

瞬くんと買い物を済ませ、いつもの様に家の門の前で手を振り玄

関のドアの鍵穴に鍵を指し込んで回す。
あれ、鍵がかかってない。
あ、お兄ちゃんもう帰ってる。
私は靴を脱ぎいつもの様にリビングに向かった。
お兄ちゃんと誰かの声がする。
この声は…あっ、ママ！
私はドアを開けようとドアノブを握る。
「どうしてダメなんだよ？俺は八重子さんの事がずっと好きなのにっ！！」
えっ、お兄ちゃん？
「ありがとう。ひなたくんの気持ちは分かるけど」
「俺には八重子さんしかいないんだ」
どういうこと？
私は目の前が真っ暗になる。
お兄ちゃんはママの事を…？
自分に優しかったお兄ちゃんを思い出す。
優しく抱いてくれたお兄ちゃん…お兄ちゃんはママを？
そっとドアノブから手を離し、ガラス越しの二人を見ながら後ずさりし、靴を履き家を飛び出す。

「っはぁ…はぁ…」
どれだけ走っただろう？
今までの優しかったお兄ちゃんがウソに思えてくる。
お兄ちゃんは…お兄ちゃんは、私にママを見ていたの、だから私を抱いてくれたの？
それなら私を抱いてくれた事が…。
いくら血の繋がってない兄妹でもそんな関係…おかしいよね？
今、分かった。
悲しい…。

私は…。

家に帰ってすぐ茜ちゃんが来た。
「ごめんね」
そっとベットに座る、また元気のない茜ちゃん。
「どうしたの？」
「うん…」
俯き親指と人指し指を擦り合わせている茜ちゃん。
夕方なのにすごく暑くて、コンポから流れる歌をかき消そうとするぐらい鬱陶しく鳴く蝉。
「暑いね、アイスティーでも飲む？」
椅子から離れた僕の手を掴み、
「いい、あのね…」
「えっ、いいの？」
ずっと手を離さない茜ちゃん。
「慰めて…くれない？」
「…」
慰めて…抱いてくれないって言ってる？
『僕が慰めてあげるから』と茜ちゃんに言った僕。
だから僕は茜ちゃんを慰めてあげないと…。
僕は咲良の事を思い出す…今は咲良と付き合っている僕。
なのになんだろうこの感じ。
僕は茜ちゃんにそっとキスをする。
茜ちゃんを抱いてあげなきゃ…。

もうどうしたらいいのか分からない。
どうしてだろうすごいショックでたまらない。
どんな顔してママとお兄ちゃんに会えばいいんだろう？

瞬くんに会いたい。
ひき返し、また来た道を戻る。
瞬くんに会いたい…。

瞬くんの家の玄関のチャイムを鳴らす。
あれ、誰もいない、瞬くん寝てるのかな？
ドアノブをひねって見る。
「あ、開いた」
静かな家、誰もいない感じ。
「瞬くんいないの？」
いいや、あがっちゃえ。
「お邪魔します」
階段を昇る、瞬くんの部屋から流れる歌。
やっぱり寝てるのかな？
「しゅ…」
瞬くんの部屋のドアの隙間から…見えた部屋の光景に私は言葉を失い、
頭を金槌で叩かれた様な感じがした。
物凄く愛し合った恋人同士の様な切ない行為に見える。
なんて言ったらいいんだろう？
そっと気づかれないように階段を降り、瞬くんの家を出る。
瞬くんと茜ちゃんの抱き合う姿が目に焼き付いている。
家にも帰りたくないのに…行く場所がない。
私は、どうしたらいいんだろう？

グラスの中を揺れる氷。

瞬くんと茜ちゃん…とても切なく見えた。
愛し合ってるの？
私達みたいに好きではなく、ただの恋愛のおままごとのようなモノではなく、愛を感じた。
茜ちゃんが年上だから…？それは違うような感じがする。
あれから何処にも行く所がなく、仕方なく家に帰った私をお兄ちゃんとママは何もなかったかの様に接する。
きっとママはお兄ちゃんを受け入れないと思う。

茜は瞬の家から帰り、北側の窓からひなたの家のを見つめていた。
大好きなはずのひなたの事を考えると必ず瞬の所にいる。
安息を求めると必ず瞬に会いたくなる。
瞬は咲良ちゃんが好きなのに私が救いの手を求めると助けてくれる。
ただの言葉の慰めではなく…身体の奥底にある何かで…。
私は…自分の気持ちが分からない。

次の日、朝からひなたが家に来る。
「どうしたの？」
「明日から合宿だから…そろそろ返事貰おうと思って」
「あー」
返事…そんな事すっかり忘れてる。
「今からうちこいよ」
「あ、でも、私…」
「何もしないよ」
「あっ、でも」
戸惑う茜の手を引っ張りひなたは歩き出す。

ひなたの後姿…以前の私なら付き合って深い中になってもまだドキドキしてた。
私、ひなたの事を…。

ひなたの家に行くと瞬もいた。
…だから私を呼んだの？
瞬は私を見るとソファーの隅っこに座りかえる。
「あ、ありがとう。瞬も来てたんだ」
「うん」
「はい、茜ちゃんどうぞ」
「あ、ありがとう」
咲良ちゃんがアイスティーを出してくれる。
「お兄ちゃんも？」
「ああ…」
なんか変な感じ、グラスの中の氷が揺れるのを見る。
「はい。今日は二人どうしたの？」
「より戻しの返事貰おうと思って」
「えっ？」
ひなた以外の私達三人は驚いた顔でひなたを見る。
「俺は別れたつもりないんだけど…」
「あ」
「返事聞かせて？」
「あ、うん、いい…よ。」
私はちらっと瞬の顔を見るけど瞬は俯きグラスの中の氷をストローで回しアイスティーを飲んでいる。
「ほんと？」
複雑な気持ち…。

なぜか知らないけど僕は無償に苛立った。
咲良の家からの短い帰り道、僕と茜ちゃんは無言で歩く。

僕は家の前を通りすぎる。
「瞬、何処行くの？」
「あ、ジュース」
「買いに行くの？」
僕が苛立っているのが分かるのか茜ちゃんは遠慮した口調で聞く。
茜ちゃんが悪いわけではないのに…。
勝手に苛立ってるのは僕。
「私も行くよ」
「そう…」
茜ちゃんの顔を一度も見ず、僕は自動販売機に向かった。

「茜ちゃんはどれにする？」
ジュースをどれにしようか指でボタンを触りながら迷う茜ちゃんをちらっと見る僕に気づいた茜ちゃんは僕を見る。
僕はさっと視線をそらした。
「瞬、どうしたの？」
「何が？」
「機嫌…悪そうだね」
「そう…？それより茜ちゃん、咲良の兄貴とより戻って良かったね」
「えっ？」
茜ちゃんは買うつもりじゃなさそうなジュースの所のボタンを押す。
「ジュースこれでよかったの？」
僕は座り込み取りだし口のジュースを取り、茜ちゃんにジュースを渡そうと茜ちゃんを見上げると、
茜ちゃんが僕をじーっと見つめ涙をポロポロ流している。
「…」
「どっ、どうしたの？」
「…」

瞬に、良かったね。と言われてなぜか胸が苦しく悲しくなる。

ひなたに咲良ちゃんへの気持ちを聞かされた時もすごく悲しかった。
立ちあがり私にジュースを渡そうとする瞬に私は抱きついた。
「あっ…」
ガァンッ…。
瞬の手からジュースの缶が落ちる。
「茜ちゃん…？」
「…」

茜ちゃんが急に抱きついてきた。
ほのかにいい匂いがする。
僕をぎゅっと抱きしめる茜ちゃん。
「茜ちゃん…」
「…」
僕も茜ちゃんを強く抱きしめ返し、
「茜ちゃん？」
そして泣きながら僕の腰をぎゅっと握り締める茜ちゃんの両手をそっと外し、
僕は激しくキスをする。

花の華。（前書き）

今週中には終わらせたかったけど終わりそうもありません。（涙）

花の華。

お兄ちゃんの気持ちと言うかお兄ちゃんがよく分からない。
私との関係を止めないとか、ママに好きだと言ってるかと思えば、
茜ちゃんによりを戻そうとか言ってたみたいだし…。
お兄ちゃんという人間が分からない。
私には、もう一つ分からない事がある…瞬くんも分からない。
男の子はやっぱり愛がなくてもできるんだ…でも、茜ちゃんとの行為は愛があるように見えた。
好きな人のそういう行為は当たり前だけど見たくなかった。
瞬くんは私とお兄ちゃんとの行為を見て正直どう思ったんだろう？
考えると涙が自然に溢れてくる。

「ただいま～」
ママは仕事が忙しく遅い帰宅。
こっちに帰ってきてもいないのと一緒。
「お帰り」
最近ママと電話すらしてなかった。
ママは歩きながら携帯電話で話し、右耳のピアスを外す。
そんなママ…私と似てるのかな、顔が似てるのかな？じっくりと見て見る。
性格は…どっちかと言えば正反対。
顔が似てるからかな？
「あー最近なんか調子悪いわ。咲良、ママお風呂入ってくるわ」
ママの口から調子悪いなんて初めて聞く。
「あ、うん」
けど、私はそんなママの言葉も気にせずＴＶに目を向けた。
ＴＶの中の人達は楽しそうにお笑い芸能人のコントに爆笑してる。
私は…泣きたい。

もうここから逃げ出したい。

見ていたＴＶ番組が終わり、私はぐっと背伸びをする。
あれ、ママがお風呂に入ってから一時間以上経つような…。
気づかなかったのかな？…そのまま寝室に行ったのかな？私は不思議に思い、
「ママ～」
洗面所を覗く。
返事がないのにシャワーの音がする。
すりガラス越しに見える人影。
「ママッ！！」
流れるシャワー…。
ママは浴槽にもたれる様に倒れている。
「お兄ちゃん来てっ、早く～助けて！！」
普段絶対出すことのない異常なほどの大きな私の声に驚きお兄ちゃんは急いで自分の部屋から
降りてくる。
「どうしたっ！？」
「早くっ、ママがっ、ママが…」

…それからの事は覚えていない。
病院の遺体安置所に永眠るママ…急いで香港から帰ってきた泣き崩れるパパ…涙も見せない生気のないお兄ちゃん。
黒い礼服、沢山の人。

忙しく日々は過ぎた…。
数少ないここの家でのママの遺品を整理する。
あんまりママとの記憶がないように感じる。
お葬式が終わってから、お兄ちゃんはずっーと部屋に閉じこもりきり…。

暑い太陽、煩い蝉…。
「あっ、そう言えば…瞬くんと海に行ってない。」
いっぱい計画立てたのに…。
瞬くんと茜ちゃん、二人のあの時の姿がまた頭に浮かぶ。
「あはは…」
なんか笑っちゃう…可笑しくなんかないのに…。
涙と一緒に笑いが止まらない。
「もうダメだよ…私」

瞬、咲良、茜、ひなた。

俺の１２年…ずっと八重子さんが好きだった。
咲良を抱いても、茜と付き合ってもその気持ちは変わらなかった。
咲良に感じる八重子さん。
八重子さんがいなくなった今、俺はどうしたらいいんだろう？
もう一度咲良を抱いて八重子さんを感じたい…。
八重子さんを感じ…？

ひなたのお母さんが亡くなってダイブ経つ。
ひなたの携帯電話に留守電を入れても返事は返ってこない。
小さい頃、多分初恋だったと思うひなたが想いを寄せていた咲良ちゃんのお母さん。
初恋の人を失うのってどんな感じだろう？
私には分からない。
本屋からの帰り道、私は大廻りをしてひなたの家の前を歩く。
「咲良ちゃん」
「…」
門の前で花に水をかけている咲良ちゃんと会う。
咲良ちゃんは花に水をかけるのを止め、私にお辞儀をする。
「大変…だったね」
「あ、はい…」
「ひなた大丈夫？」
「部屋から出てこないんです」
咲良ちゃんは困った顔で寂しそうに言う。
「そう…なんだ…」
「茜ちゃん…お兄ちゃんを助けてあげて…」
「咲良ちゃん…」
妹としての切実な思い、でも私はそれに答えられない。

「お兄ちゃんの大好きな茜ちゃんならきっと…」
そう言う咲良ちゃんの顔をみて私は首を横に振る。
「ひなたを助けてあげられるのは私じゃないよ、咲良ちゃんあなただよ」
「茜ちゃん…？」
「ひなたはあなたを想ってるもの…」
私とは違う透き通る白い肌の咲良ちゃん羨ましいと思っていた…以前の私ならきっと今みたいに平然な気持ちでこんな事言えなかったと思う。
「お兄ちゃんが想ってるのは…茜ちゃん、ウチのママなの」
「ひなたがあなたのお母さんを好きだった事は知ってる…でも、私は違うと思う」
「…」
「私ね、ひなたにあなたに対する気持ちを面と向かって言われた事があるの。あの、あの時ね…」
「あ」
咲良ちゃんは困った様子で顔を赤らめ私を見て俯く。
「あの時私が感じたのは、咲良ちゃんのお母さんの事を好きだったのは幼稚園の頃で、今は咲良ちゃんのお母さんを好きなんだと言う想い込みなんだと思う」
「…」
「初恋はいつまでも綺麗な想いでとっておきたいから…私、何言ってるんだろう？訳が分からなくなっちゃった」
「…」
「上手く言えないけど…。ひなたが今好きなのは私じゃない、私は妹を好きだと言う気持ちを世間に誤魔化す為のものだと思う。…血は繋がってなくても義兄妹だから…」
「茜ちゃんは…」
咲良ちゃんは私に何かを言いかけて止める、言おうとしたんだろう？
「なんか何言ってる分からなくなっちゃったけど…あなたが少しで

もひなたを想うなら今度はあなたがひなたの事助けてあげて…」
「茜ちゃん」
ここまで言えるようになったのは、きっと瞬のお蔭…。

茜ちゃんが言う事…『今度はあなたがひなたの事を助けてあげて…』
いっぱいお兄ちゃんに助けられた。
『茜ちゃんは瞬くんの事どう想ってるの？』聞きたかった、けど途中で止めた言葉。
お兄ちゃんを助けられるのは本当に私なの？
私には分からない…。
どうしたらいいんだろう…？

僕は、自分の本当の気持ちを知ってしまった。
茜ちゃんを大切に想う。
目の前に咲良がいても茜ちゃんと咲良の兄貴に嫉妬した。
茜ちゃんを取られたくないと思った。
咲良がいいと想ったのは本当、だけど僕は茜ちゃんが好きだ…。
でも、今の咲良には言えない。
これ以上咲良を悲しませたくないと思う。
僕は、どうしたらいいんだろう？
瞬、茜、咲良、ひなた。それぞれ４人の気持ちが恋（こ）うさする。

あがってはシャワーの様に落ちてくる花火。（前書き）

ずっと４人の気持ちが交互してる場面で読みにくいかもしれません。

あがってはシャワーの様に落ちてくる花火。

４人の気持ち…。
二人の兄妹。
二人の幼馴染。

僕の気持ちはもうはっきりしている。
今は、それを咲良と茜ちゃんに言うべきか言わずにこのままでいるべきかを考える。
ベットの上で天井を見つめながら家の前を通る車の音に耳を傾ける…。

茜ちゃんに言われた事を考えてみる。
私は瞬くんを好き…大好き。
時間が経てばきっとお兄ちゃんは元に戻れると思うけど…。
でも、お兄ちゃんをこのまま知らんふりして見捨てる訳にはいかない。
いつも私を守り優しくしてくれたお兄ちゃん。
あの川辺に雨の中傘もささずに心配して迎えに来てくれたお兄ちゃんを思い出す。
急いで自分の服を私に着せてくれたお兄ちゃん。
今度お兄ちゃんをこの場から救ってあげるのは私なんだと、今、確信する。

私は、咲良ちゃんには勝てないとあの時感じた。
ひなたの妹以上に感じた咲良ちゃんへの気持ち。
ひなたに言ってあげるべきかな？あなたの咲良ちゃんのお母さんへ

の感情は過去のものなんだよ。
あなたは目の前にいる咲ちゃんを愛しているんだよ。って。

最近ふと目を閉じると、八重子さんではなく咲良の顔が浮かんでくる。
八重子さんが亡くなってから色々な事を考えていると、八重子さんを好きで胸がドキドキしてたのは小学校の時親父と八重子さんが再婚した数日までのような感じがしてきた。
忙しい両親に代わって咲良を守ってやらなければといつも思っていた。
あの咲良の笑顔をずーっと見たいたい…。
でも咲良には大切な人だと想う人ができた…。
兄の俺を必要としてはくれないのか…。

明日は花火大会の日だ…。

僕は咲良に電話をする。
「明日、気晴らしに一緒に花火を見に行こう」
『うん』
僕が何かを言いたいか知ってるのか、咲良しは小さな声で返事をする。
「じゃぁ、夕方の六時頃咲良の道の方の歩道橋の下で待ってるから」
『うん、じゃぁ…』

私はひなたに電話をした。
去年の花火大会の帰り道約束した。
『来年も絶対一緒に行こうね！』

ひなたは電話に出てくれるかな？
呼び出し音１０コール。
やっぱり会いに行った方のが早いかな？
私は諦め、ＰＷＲＨＬＤのボタンを押そうとする…。
『はい』
「ひなた？」
『ああ、茜…』
「知ってる？明日、花火大会だよ…」
『あ、そうか…もうそんな日になるんだ』
「気晴らしにちょっと行かない？」
『うん、そうだね…』
「じゃぁ、去年と一緒の所で夕方の六時頃待ってる」
『うん』

今日は雲一つない真っ青な晴れた日。
でも、僕の気持ちはこの空の様に晴れた気持ちではなかった。
咲良に別れを告げる。
そう決めたから…。
午前中はまだ終わっていない宿題を片付ける。
振られる時よりも振る時の方が辛い感じがする。

「瞬っ、母さん達行ってくるからね」
「何処に行くんだよ」
「言わなかった？毎年恒例のバーベキューよ」
毎年恒例、花火大会の日に茜ちゃんの親達と複数のご近所が集まってするバーベキュー。
「あ、そうか」
「冷蔵庫に素麺入れといたから昼はそれ食べて、夜は適当に食べて」
「分かった」

「じゃぁ、バイ！！」
人の気も知らないで…。
ウチの親と茜ちゃんの親、僕たちの事知ったらどう思うかな？きっと殺されるだろうな…。
笑っちゃう。
人の人生どうなるかなんて誰にも分からないね。
まだ高校生になりたてなのに…そんな事思う僕は親父か？
ああ、また勉強どころじゃなくなった。
「寝よっ」
僕は椅子からぼてっと床に落ちた。
親達がワイノワイノ楽しそうに話している。
僕はそれを聞きながら深い眠りについた。

「暑いっ」
エアコンのタイマーが切れた暑い部屋、深い眠りについていた僕は目を覚まし起き上がりお腹をボリボリ掻く。
「んっ、何時だ？」
携帯電話で時間を見ると五時三十分。
やっ、やばい。
僕は急いでシャワーを浴び服を着替えた。
はぁ…なんか頭がぼーっとする…。
部屋に戻り、咲良の家の方を見と咲良が家から出てくる。
浴衣姿の咲良…。
「さっ、行くか」
財布をジーンズの後ろのポケットに突っ込み家を出、待ち合わせの場所に走っていく。
「お待たせっ！」
「時間前だね」
ニッコリ微笑む咲良の浴衣姿、紺色の浴衣の生地がただですら肌の

色が白い咲良をより一層白く綺麗に見せる。
「咲良、すごく似合ってるよ」
「ありがとう」
しばらく見つめあってたら後ろから茜ちゃんが歩いてきた。
気まずい。
「瞬達も花火大会？」
「ああ…」
黄色い浴衣姿の茜ちゃんらしい茜ちゃん。
何度も見た事があるけれど今日は違う気持ちで茜ちゃんを見る。
色っぽくて抱きたい…と想う。
咲良がいてもやっぱり茜ちゃんを好きだと想う。
咲良と茜ちゃんを交互に見ていると、
「お待たせ、茜」
咲良の兄貴が歩いてきた。
咲良の兄貴は僕をちらっと見、茜ちゃんの手を引っ張り歩き出す。
「あっ、ひなっ…」
茜ちゃんは振り返り僕をちらっと見ると咲良の兄貴を見た。
なんだよ茜ちゃん結局上手くいってんのかよ。
ぎゅっと拳骨を握る。
「さっ、私達も行こうっ！」
ずっと茜ちゃんを見ていた僕の気持ちに気づいたかの腕に自分の腕を絡ませ咲良は歩き出す。
「あ…うん」
咲良の存在を忘れてた。
僕は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

人が行き交う中、僕は咲良との別れの事を考えている。
ぎゅっと僕の腕を掴む咲良。
言わなきゃ…帰りに言わなきゃ…。

ヒュールルル、ッバ～ンッ。
花火が上がると足を止めて空を見上げる人々。
しばらくの間、辺りが明るくなる。
僕は花火では咲良の顔を見て、まだ言うつもりではなかった言葉を次に上がった花火の音と同時に言う。
「僕達、終わりにしよう…」
こんな時に言うなんて僕はなんて汚いんだろう。
花火の音と見物人の声で聞こえてないかもと、言った後で思った僕に咲良はコクンと頷く。
「今日言われると思ってた」
思いもしなかった言葉が返ってきた僕は驚いた。
「…」
「この花火大会が終わったら、私達も終わりね」
咲良は、きっと気づいてたんだ…。
僕は俯き、「ごめん」と誤った。
最低だね僕…。

思ったより冷静に終わりを迎えられそうな気がする。
色々考えて、もう決めた。
私はお兄ちゃんと歩いていこう。と決めた。
今度は私がお兄ちゃんを…お兄ちゃんがママを見ていようが、私はママの代りだろうがそんなのはもうどうでもいい…お兄ちゃんを元の元気なお兄ちゃんにできるなら、私はママの代りをしよう。
でもこの決心を、私は瞬くんには言わない。
瞬くんへの最初で最後の私の意地悪…。

ひなたはずっと空を眺めてる。
去年もこの川原で二人座って見たね。
「ねぇ、ひなた」

「ん？」
「前も言ったけど、ひなたはきっと咲良ちゃんが好きなんだよ」
「…」
「ひなたは、今、お母さんが好きなんだと思い込んでるだけだと思うの…」
ひなたは私の顔をじっと見つめる。
「…」
「今考えないで思い出すのは誰…？」
私が聞いた質問にひなたは俯き、「咲良」と答える。
「でしょ？私でもお母さんでもない、咲良ちゃん…なんだよ」
「…」
「ひなた？」
私はひなたの顔を見て微笑む、ひなたも私を見て微笑む。
「ごめん…そう、みたい…」
「謝らないで」
謝られなくてもいい。
私の気持ちはもうひなたにはない。
でも、この事はひなたにはナイショ…。

　茜には悪い事をしたと思う。
告白してきた茜を可愛いと思ったのは本当の事…。
でも、可愛いと思うがそれ以上の気持ちは沸かなかった。
ごめん…茜。
最後までごめん…な。

「賑やかなここでさよならしよう」
「そうだね」
花火が終わり帰る人ごみの中、咲良は言った。
人がいない場所は淋しさが一段と増すから…せめて賑やかな所で…。
僕も咲良と同感。

「新学期からはただの同級生ね」
「うん、ただの同級生」
「じゃあね」
「うん、じゃあね」……

花火が終わり帰る人達…。
私とひなたはしばらくの間黙って座っていた。
花火の後の淋しい感じがすごく嫌い。
いつもそう思う…。
もうそろそろ言わなきゃね。
私はゆっくりと口を開く。
「じゃぁ…ここで」
「…そうだね」
私は立ち上がりをひなたを見下ろす。
「ひなた」
ひなたは私を見上げゆっくり立ち上げると
「送っていかなくても大丈夫だよね？」
ニッコリ微笑む。
「うん」

「じゃぁ…」
「さようなら」
ひなたの姿が私から離れるのを背中で感じる。
私はひなたが去った後もしばらく川原ですわり花火の後の余韻を感じる。

「茜ちゃん？」
私を呼ぶ声に振り向く。

僕が呼んだ名前に、茜ちゃんが振り向いた。
「瞬？」
「何してるんだよ、こんな所で…」
僕はかけて茜ちゃんの隣に座る。
「咲良ちゃんは？」
「咲良の兄貴は？」
二人して同時に聞く僕達。
「終わりにしたの…」
茜ちゃんは微笑むとそう答え、僕も微笑むと「僕達も終わりにした」と答える。
「あはは…可笑しいね」
「ほんとだね」
二人で笑う。
川面に映る、揺れる月。
「花火の大会の後ってなんか淋しいね」
茜ちゃんは川面を淋しそうな顔で見つめて言う。
「うん、僕今日初めて知ったよ」
「瞬…」
「ん、何？」
「私、瞬が好き」
僕はそっと茜ちゃんにキスをする。

「僕も茜ちゃんが好きだよ」
茜ちゃんもお返しの様に僕にキスをする。
そして、僕の首の後ろに手を回す。
「茜ちゃん…」
僕は茜ちゃんの背中に腕を回しぎゅっと抱きしめ返した。

瞬くんと別れ、急いで家に帰る。
玄関の電気がついてる。
私は思いっきり玄関のドアを開け、「お兄ちゃんっ！！」と呼ぶ。
お兄ちゃんはニッコリと微笑みながらリビングのドアを開け
「何だよ！お前らしくないでかい声出して…」
「お兄ちゃん」
「あ～あ～、浴衣姿で走ってきて、どうしたんだよ」
お兄ちゃんの顔を見たら自然と涙が溢れ出す。
「…」
「何泣いてるの？」
私は下駄も脱がずにお兄ちゃんの所まで走り、
「お兄ちゃんっ」
「こらっ！！お前、下駄のまっ…」
下駄を指差すお兄ちゃんに抱きつきキスをする。
「お兄ちゃんっ」
「こらっ、咲良っ…」
「お兄ちゃん」
お兄ちゃんは私の首に顔をうずめ、首筋にそっとキスをする。
そして私とお兄ちゃんは唇を重ねながら座り込み、慌てた様に服と浴衣を脱ぐ。
「お兄ちゃん…」
裸のお兄ちゃんと私。
「大丈夫、咲良…？」

そっと頷く私にお兄ちゃんは優しく微笑み、キスをする。
「お兄ちゃん」
私はお兄ちゃんの足の上に乗っかりお兄ちゃんの首裏に腕を回しお兄ちゃんをぎゅっと抱きしめる。
「咲良、苦しいよ」
何日振りだろう？お兄ちゃんの肌に触れるの…。
何日振りだろう？お兄ちゃんに抱かれるの…。
すごくホッとする。

僕と茜ちゃんは手を繋ぎながら家に帰った。
二件とも家の明かりはついていない。
「きっとカラオケだね」
「あ～、あの不良両親」
「ウチおいでよ」
「うん」
なぜか急に心臓がドキドキしてくる。
今までは自分の気持ちに気づいていない上の茜ちゃんとの接触。
今、僕と茜ちゃん二人きりなんだ。
こんな事思うのは初めてな感じがする。
「アイスティーでいいよね？先に上行ってて」
「あ、うん」

僕は茜ちゃんの部屋の窓を開け、咲良の部屋を見る。
「お待たせ」
浴衣姿のままの茜ちゃん…。
「浴衣脱がないの？」
「あ、忘れてた」
「いいよね、女の子の浴衣姿って…なんかドキドキする」
「ふ～ん、そういうもの？」

茜ちゃんはアイスティーのグラスを僕に手渡しながらそっとキスをしてくる。
「しよっか？」
「親…帰ってくるよ」
「…きっと午前様だよ」
僕も茜ちゃんの目を見ながらそっとキスのお返しをする。
「あっ」
グラスの中のアイスティーが少しこぼれ茜ちゃんの浴衣が少し濡れる。
「大丈夫だよ」
「…」
茜ちゃんの浴衣の帯にそっと手をかけ、キスをしながら帯を外す。
スルッと帯が落ちるとと浴衣の中から程よい肌色の綺麗な何も着けていない茜ちゃんの肌が現れる。
「瞬」
僕は今日初めて茜ちゃんの裸体をゆっくり見る。
「茜ちゃん綺麗だね」
「そんなまじまじと見ないでよ」
茜ちゃんは顔を真っ赤にし浴衣を体に巻き着けようとする。
「いいじゃん」
「嫌だ」
茜ちゃんは顔を僕からそらし、窓の方を見た。
「あっ」
僕も茜ちゃんが見る方を見る。
薄い桜色のレースのカーテンがゆっくりと風に靡いている。
僕と茜ちゃんは息を吸うのも忘れるかの様にじーっと咲良の部屋を見つめた。
電気の明かりで見える、部屋の中。
でも以前のように二人の姿は見えない。
「茜ちゃん」

「あ、ん？」
僕は茜ちゃんの肩からゆっくりと浴衣を下ろし、茜ちゃんの体をベットにゆっくりと倒す。
そして僕と茜ちゃんは愛のある行為に身を泳がした。

ｌｏｖｅ　ａｆｆａｉｒｓ。（後書き）

ノートパソコンを取り上げられ、デスクトップの慣れない画面、慣れないキーボードに苛々しながらの執筆。（そんな事どうでもいいか？）

次回、最終回にしたいです。

感想お待ちしております。

希凛希。

夏の終わりと共に…。（前書き）

最終話です。

夏の終わりと共に…。

次の日の朝、玄関チャイムが鳴る。
「んん？」
慌しくなる鳴るチャイム。
隣でスースー寝てるお兄ちゃんを揺すって起こす。
「お兄ちゃん、誰だろうお兄ちゃん？」
「んん、今何時？」
時計を見ると、朝の十時。
「わっ、もうこんな時間　」
「俺が、出てくるよ」
お兄ちゃんは服を着ると、下に下りていった。
私も急いで服に着替え、耳を澄ました。
「なんだ、まだ寝てるのか？」
パパの声だ。
「どうしたの？急に」
二人の会話を聞く。
「この家が売れた。香港に行く。こっちの学校やなんだかんだの手続きをしに帰って来たんだ。」
「はぁ？」
お兄ちゃんの驚く声が聞こえる。

（えっ？）
何それ？私、知らない…。

「咲良は？」
「上にいると思う」
急な展開で訳が分からない。
この家が売れた？

「起こして来い。」
「あ、うん」
私はお兄ちゃんが上に上がってくると同時に部屋から出た。
「お兄ちゃん？」
「聞こえてた？だってさ、はぁ～」
お兄ちゃんはため息をつき引き返す。
「パパ、おはよう」
「咲、おはよう」
ニッコリ微笑むパパ。
「パパ、私達香港に行ってパパと暮らすの？」
「聞いてたのか？」
「八重子がいなくなった以上、家族別々に暮らす必要がないからな」
「…」
「アメリカの八重子の荷物はもう向こうで処分してもらったし、急で悪いが…二学期から香港の学校に通ってくれ」
「…」
私とお兄ちゃんは顔を見合わせた。
私は、お兄ちゃんと一緒なら…。
お兄ちゃんとの関係を新しい土地で、パパに認めてもらえれば…。
私は、「いいよ」と頷く。
お兄ちゃんはしばらく考え、ちょっと戸惑った感じだけど、「分かった」と、返事した。
「すまんな」
パパはそう言うとまた出かけていった。
「ほんとにあの人たちはいつでも急だな」
お兄ちゃんは苦笑いをした。
再婚も、ママのアメリカ転勤も、パパの香港転勤も、子供に何一つ相談なく決定した後に報告。
「ほんと、勝手だよね」
「今度は俺達が振り回してやろうぜ」

お兄ちゃんは私の顔を見つめ言った。
「お兄ちゃん…」
昨日、心に決めた事、私とお兄ちゃんは同じ事を考えてくれてるんだと確信する。
「驚くぞ、親父」
「だね」
言わなくても分かってくれる。
ずっと、一緒にいようね、お兄ちゃん。
これからまた忙しい日が続きそう。

咲良と別れてから、一週間後ぐらいに咲良からメールが届く。
明日、日本を発つことになりました。
連絡しようか迷ったんだけど、友達として連絡しておきます。

突然の事に驚いた僕は慌てて咲良の家まで走った。
気づかなかった。
引越しセンターの車が止まっている。
次々と出される荷物。
「咲良っ！、いる？」
僕が呼んだ声に、咲良はニッコリと顔を出す。
「瞬くん来てくれたの。どうしたの、汗びっちょり」
僕を見て、笑う咲良。
「あっ、びっくりして走ってきたから」
腕で汗を拭く僕に咲良は自分のタオルで僕のおでこを拭いてくれる。
「ほんと、瞬くんのそういうとこ好きだな」
咲良の言葉に胸を締め付けられる。
「ごめん」

俯く僕のおでこからタオルをそっと離し、
「明日、十時頃、ここを出るから茜ちゃんと一緒に見送りに来てくれる？」
「あ、うん」
「お兄ちゃん今いないし、茜ちゃんと会いたいと思うから」
「うん」
「じゃぁ、今日は忙しいから明日ね」
「うん」……

次の日、僕は茜ちゃんと咲良の家を訪ねた。
今日は、この夏で最高気温らしい。
朝から僕達四人の会話をかき消す勢いで蝉が鳴いている。
もうじき、九月なのにな…。
僕は咲良と、茜ちゃんは咲良の兄貴と咲良の家の前で握手をする。
「ありがとう瞬くん」
「元気でね咲良」
ニッコリ笑う僕達。
「ひなた、元気でね」
「ああ、お前もな」
二人もニッコリ笑う。
「さ、行こうか？」
「うん、パパ…」
「ああ」
咲良の親父は僕と茜ちゃんに一礼すると三人はタクシーに乗り込んだ。
「また会えたらいいね、みんなで」
咲良が言う。
「うん、そうだね」
「ひなた、バスケがんばってね」

「ああ、茜も砺波とがんばれ」
「えっ？」
咲良の兄貴は僕を見てニッコリ笑う。
初めて、咲良の兄貴の顔を見た感じがする。
僕は茜ちゃんの手をぎゅっと握る。
「じゃぁ」
「うん」
タクシーが動き始める。
僕と茜ちゃんはタクシーが見えなくなるまで見送った。

「あの二人、ずっと一緒にいられるよね」
僕は茜ちゃんの手をぎゅっと握り締める、僕の気持ちに答える様に
僕の手を握り返す茜ちゃん。
「うん」
「なんか不思議な兄妹だった」
「あは、そうだね」
暑い暑い夏はまだ続きそう。
「夏休みの終わりの日、二人で何処か行こうか？」
「いいね、瞬おごってよ」
「任せとけよ」

僕は隣のお姉ちゃんの茜ちゃんが好きだ。
色々あったけど、茜ちゃんを大事にしていきたい。
夜、僕の部屋の北側の窓から今はもういない咲良の部屋の窓を見る。
春の夜、この窓から始まった不思議な恋。
人生に起こるすべての事を全部経験したような感じが、オーバーだけどする。
ベットに入り、春の事の懐かしく思う。
咲良…幸せになるんだよ。
僕は眠りにつく…。

朝早くに茜ちゃんの電話で起こされる。
「んん？」
携帯電話を探す。
「もし、もし…」
『瞬、私、行きたくないっ！！』
何がだよ？朝から大泣きの茜ちゃん。
まだ半開きの目を擦る僕。
「は～何処へ？」
まったく朝からなんなんだ？
『お父さんの仕事の都合で、家族みんなでドイツに行くことになったの。ふえ～ん。』
「えっ？」
な、何、言ってる？
これは夢だよ、僕は夢を見ている？？？
慌ててパジャマのまま茜ちゃんちへ走り、玄関チャイムの存在を忘れ玄関ドアをどんどん叩く。
「茜ちゃ～ん」
「あら、瞬くんどうしたのパジャマで…？」
のん気な顔で茜ちゃんのお母さんがドアを開き僕を見る。
「おばさんっ、ド、ドイツ行くんだって、本当？」
「あらっ、情報早いわね。ふふっ、本当よ」
「あ、茜ちゃんはいる？」
「二階よ」
「お邪魔します」
慌てて茜ちゃんち階段を上り、「痛っ」足を踏み外し脛を打つ。
すごい痛いけど…痛いけど、でも僕はそんな事はどうでもいい。
痛いのなんかどうでもいいっ。
今は茜ちゃんが先だ。

「茜ちゃんっ！」
「瞬っ！」
「うわぉ…」
ドアを開けたと同時に茜ちゃんが抱きついてきた。
「一ヶ月後だって～、ふえ～ん。嫌だよ～」
一ヵ月後…？。
後、一ヵ月後？
「茜ちゃん…」
この間からバタバタと次々と…僕はもう…何がなんだか分からない。
泣いてる茜ちゃん…。
泣きたいのはこの僕かも…。
僕はどーなるんだよ？

慌しく一ヶ月も見事過ぎようとしている。
季節はあっという間に秋。
制服が冬服変わり、この制服のグレーと同じで僕の心はどんよりしている。
明日は茜ちゃんがドイツに発つ日。
僕達は別れを惜しむ様に、何度も愛し合った。
多分もう二度と会えないと思う。
茜ちゃんは何度も『離れたくない』と言う。
僕も『放したくない』と言う。
でも、時間は無情にも僕と茜ちゃんの別れを待ってはくれない。

朝、茜ちゃんちの前で僕は両親と近所の人達と一緒に茜ちゃん家族三人を見送る。
茜ちゃんと僕が好き合ってる事は誰も知らない。
知らないから、僕と茜ちゃんは握手をして
「瞬、仲良くしてくれてありがとね」

「うん、向こう行ったらたまには手紙ちょうだいね」
そんな他愛もない会話でさよならをする。
僕は茜ちゃんも咲良達と同様、見えなくなるまで見送った。

結局、僕は一人になった。
ゆったりと、でも、足早に過ぎていった様な日々…。
甘いような酸っぱいような不思議な日々。
僕は静かにゆっくりと歩く。
まだなんとなく生暖かい十月の風が僕の横を吹き通る。
僕はふと足を止め、振り返る。
誰もいない…。
「あっ、雨が降ってきた」
空を見上げると霧雨が僕の顔を濡らす。

僕は忘れない…あの二人の兄妹と隣に住んでたお姉ちゃんを…。

夏の終わりと共に…。（後書き）

最終話まで読んでくださった方ありがとうございます。感謝いたします。
ゆっくり丁寧に書こうと決めて書き始めたこの物語も結局早く雑に終わらしてしまったかも？と思います。
（相変わらず描写が…）
もしよろしければ感想など…。

希凛希

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6706b/

ＬＯＶＥ　ＡＦＦＡＩＲＳ

2010年11月12日07時33分発行